インド哲学仏教学研究 19, 2012. 3

鳳潭の生没年及び出身地に対する一考察

王　芳

1　問題の所在

鳳潭は江戸中期華厳学の再興を志した学僧である．また，一切経に漏れた仏教古佚典籍を収集・版行し，目録を作るなどして，仏教文献の流伝と保存にも大いに貢献した．華厳・天台・禅・倶舎・真言・浄土など幅広く諸宗に渉り，64 部 233 巻[1]の膨大な著述も残したにもかかわらず，彼の生涯について述べられた史伝資料は非常に少なく，生没年及び出身地についてそれぞれ三説あり，未だに詳細な研究はされてない．現在のところ，より整備された古い資料は下の二点のみである[2]．第一は，弟子の覚洲（覚州)[3]の「大日本華厳春秋」(宝暦五（1764）年) の最後に収めた鳳潭年譜[4]（以下は「華厳春秋」と略す) である．覚洲は正徳五（1715）年鳳潭によって剃度され，鳳潭の亡くなるまで 24 年間弟子であり，鳳潭の出版事業も大いに助けた人である．第二は筆者が発見した資料である政田義彦の『浪速人傑談』(安政二（1855）年序，万延元（1860）年後序）巻下にある「釈鳳潭」という伝記である[5]．

これらを含めて，以下，年代順に史料をまとめる．

Ⅰ．最も古いもの　狂歌集『狂歌時雨の橋』(1742 年跋）に鳳潭を言及する一箇所：「もとより潭和尚は法橋と遠き縁家にして」[6]

Ⅱ．覚洲の「華厳春秋」(1764 年）にある完全な鳳潭年譜

---

[1] この数字は，筆者が 2006 年に提出した修士論文「鳳潭における禅理解と批判 —『鉄壁雲片』を中心に」を撰する際に統計したものによる．全日本仏教会寺院名鑑刊行会 [1969] p. 149，京都市右京区華厳寺の項目によると，140 余冊を上梓したという．

[2] 又『望月仏教大辞典』[1936 編]（以下望月と略す）に「山城松尾大華厳寺記」があると記載してあるが，残念ながら，未見である．

[3] 覚洲 (？ –1756 宝暦六年)，大阪和泉堺出身，俗名中村宗玄，号は鳩．正徳五（1715）年四月から鳳潭亡くなるまで 24 年間鳳潭の弟子となり，特に唯識，法相に優れた．現存した著作は殆ど龍谷大学が所蔵する写本であり，『衣幞集』，『白虎八転声』二巻 (1750 年刊)，『八転声秘書』(元文六 1741 年写)，『大日本華厳春秋』一冊（1764 年)，『大乗起信論義記講苑』三巻，『成唯識論述記東海集顕伝』十冊（1737–1739)．仏教以外，天文に関わる『解嘲論』一冊もある（鷲尾順敬『日本仏家人名辞典』，『国書人名辞典』参照)．

[4] 活字本は鎌田 [1981] に付記として収録された「大日本華厳春秋」(pp. 166–191）である．しかし東大寺図書館所蔵の草稿本から活字に写す時，多少の誤りが生じた．p. 183 明暦三年の条では「姿」は「次女」であろう．p. 185 延宝八年の条は「待」は「侍」，「失」は「先」であろう．これに関する言及は，塩崎 [1994] にも指摘されている．この「華厳春秋」の全文は漢文であり，以下全ての引用を出す時，直接書き下しとする．特別の場合は，先に漢文を出し，書き下しを付す．

[5] 『浪速人傑談』は，儒学・武技など分野別で章立てし，最後の比丘伝には，鉄眼・鳳潭・契沖など六人を収録する．市島 [1908] に所収．政田義彦（生没未詳）江戸後期の人．名は義彦，号は烏有山人．安政二（1855）年，『浪速人傑談』を著す．兄李角（1816 年 30 歳で没）は五竹庵木僊門の俳人 (『国書人名辞典』参照)．

[6] 紀海音没年に出版された追善狂歌集『狂歌時雨の橋』(寛保二 (1742) 年跋）に所収，横山 [1980] p. 342)．法橋とは，紀海音のこと．

Ⅲ. 雨森芳洲の随筆『橘窓茶話』（1786）に一箇所：「潭新タニ華厳宗ヲ立ツ，寺有リ松尾南ニ在リ．潭同胞三人，或イハ伝奇ヲ以テ，或イハ諧詞ヲ以テ，俱ニ世ニ于イテ名有リ」[7]

Ⅳ. 富田景周編集の『燕台風雅』（1825 年）に一箇所：「独リ越中ニ於テ，其ノ学識卓越タリ，海内ニ名ヲ得ル者ハ鳳潭ナリ，鳳潭，越中埴生邑ノ産ナリ」[8]

Ⅴ. 政田義彦の『浪速人傑談』（1860 年）巻下の「釈鳳潭」伝

その他，彼の生涯をたどる助けになるものとしては，まず鳳潭肉筆の倶舎論の光記と宝疏[9]がある．この文献には鳳潭自身の詩文や識語がある．また，京大所蔵の鳳潭肉筆と考えられる「華厳寺鳳潭証文」[10]という資料がある．現存する鳳潭の著作の奥書，序文などのうち，いくつかについては著述年代などが明記されているものがあり，彼の生涯をうかがうことができる．他に，同時代の漢学者らによる記載が若干あり[11]，参考にできる．

以上の資料のうち，先行研究に言及されておらず，筆者が発見した資料は，Ⅴ. 政田義彦の『浪速人傑談』の「釈鳳潭」伝以外，「華厳寺鳳潭証文」（1723 年）とⅠ. 狂歌集『狂歌時雨の橋』（1742 年跋) の中の記述と，合わせて三点である．

次に，後代の研究や辞書の記述について述べる．まず鷲尾順敬が彼の学術の歴史を詳細な記述にまとめた（『日本仏家人名辞典』[1903 編] の鳳潭の項目を参照）．また大正 7（1918）年に作られた軸「洛西松尾華厳寺開山鳳潭和上伝」[12]がある．内容は殆ど鷲尾説と同じで，ある所には脱字や文義不通の箇所があり，恐らく鷲尾の鳳潭伝を写すときの脱落ではないかと思われる．また，亀谷聖馨・河野法雲共著『華厳発達史』[1913] 21 章，鏡島元隆「華厳鳳潭と禅」[1951]，高峰了州『華厳思想史』[1963] などがあるが，内容は鷲尾説と大同小異である．

一方，『望月』[1936 編] における僧濬の項目は，「華厳春秋」と鷲尾説のそれぞれの特色を取り，前者の若年鳳潭の肖像と後者の中で述べられた学術史の詳細を合わせて作ったと考えられる注目すべき内容になっている．

このような資料上の制約と先行研究の少ない状況下では，鳳潭の生涯及び事跡全体を辿

---

[7] 原文は漢文：「潭新立華厳宗．有寺在松尾南．潭同胞三人．或以伝奇．或以諧詞．俱有名于世．」『橘窓茶話』（天明六 (1786) 刊）巻中，日本随筆大成編集部 [1974] 所収，p. 391．雨森芳洲（1668–1755），徳川中期の儒者（[1937]『日本人名大事典』第一巻 p. 121，平凡社）．

[8] 原文漢文：「独於越中，其学識卓越，得名海内者鳳潭也．鳳潭，越中埴生邑之産也」，後『読書会意』に載っている鳳潭と徂徠の交際の引用である．富田 [1915]（東大所蔵）巻七，九オ．富田景周（1744–1828）は，徳川中期の郷土史家，金沢藩士．著作は『越登賀三州志』，『燕台風雅』など（[1937]『日本人名大事典』第四巻 p. 450，平凡社）．

[9] 村松 [1970] pp. 84–94

[10] 華厳寺鳳潭証文は享保八（1723）年四月に鳳潭は松室式部氏に出した証文である．『松尾月読社文書』p. 164 に所収され，京大蔵本，東大史料編纂所影写本がある．鳳潭の肉筆だと考えられる．

[11] 原田温夫の『東岳先生筆疇』(巻二，十九丁オ―二十オ，論語億下・攻乎異端条．安永五年（1776）刊，慶応大所蔵)；渋井孝徳の『読書会意』（巻下，寛政六年（1794）刊）；原念斎 [1994]（巻六，p. 288，荻生徂徠条，）の三文の中に鳳潭と荻生徂徠との問答があるという．

[12] 新潟県柏崎市立図書館所蔵の特別資料と資料目録にある放牛舎桃湖が書写した軸である．放牛舎桃湖という人物は未詳，恐らく当時芸能界の人であろう．書写者は藤井界雄であり，養父藤井宣界（新潟県浄土真宗西本願寺派の僧，光西寺住職）に命じられ，鳳潭の像と伝記を書く（画く）ことになったということを記載した．

ることは極めて困難である．上記のように，古い五点の資料のうち，三点は一，二文程度の短い記述に留まっている．また政田の「釈鳳潭」全文も，406 文字のみの小文である．これらに対して，「華厳春秋」は鳳潭の出生から亡くなるまでが詳細に記された年譜資料を含み，前の四点と比べられないほど史料価値が高いものであると思われる．

ここで問題となるのは，若い鳳潭に詳しい「華厳春秋」における鳳潭四十歳までの記録の信頼性についてである．例えば，生没年，出身地については，従来諸説があった．又，鳳潭と鉄眼の師弟関係については，前挙げた五つの史伝資料の中，「華厳春秋」と『浪速人傑談』以外，狂歌集『狂歌時雨の橋』，雨森芳洲『橘窓茶話』，富田景周の『燕台風雅』においては，全く言及されていない．後の資料においても，例えば鷲尾説と『華厳発達史』のどちらにおいても触れられていない．果たして「華厳春秋」に信頼性はあるのか．それとも覚洲は大蔵経出版のため当時もすでに名高い鉄眼と鳳潭師の関係を捏造し，師の鳳潭乃至自分自身を高く位置づけしようと意図したのか．出身地なども，この目的に合わせ，変更したのか．このため，小論は，「華厳春秋」の記載内容を，二点の新資料，現存する鳳潭の著作の奥書，彼と関連する鉄眼禪師研究成果などをあわせ見ることにより，その信頼性を確かめる．そして「華厳春秋」を主に取り上げ，鳳潭の生没年と出身地について考察してみる．

2　生没年，出身地について

生没年と出身地の問題について若干の考察を行う．まず生没年について，没年は確実であり，全ての資料では元文三年（1738）二月二十六日に没したと記しているが，しかしその出生年月については，以下の三説がある．

A. 承応三 (1654) 年（没年 85 歳[13]）
B. 明暦三 (1657) 年（没年 82 歳）
C. 万治二 (1659) 年（没年 80 歳）

A 説は，鷲尾順敬の『増訂日本仏家人名辞書』[14]（以下は『仏家』と略す），『日本仏教宗派事典』と『日本大蔵経』（索引，開題 1919–1921）などの主張である．

B 説は，伝統的な華厳研究者亀谷聖馨，河野法雲の『華厳発達史』[1913]，高峰了州の『華厳思想史』[1963]，鏡島元隆の「華厳鳳潭と禅」[1951]，小野玄妙の『佛書解説』[1933] の主張である．

C 説は，上記古い五点の資料に唯一生年が明記されている覚洲の「華厳春秋」，そして結城令聞，小島岱山[15]及び『望月』『国史大辞典』『国書人名辞典』の辞書類などの主張である．

鳳潭自身が奥書などにおいて，生年を記した例はない．これら諸説があるため，後の学者もこの点について曖昧となったきらいがある．例えば東洋学者神田喜一郎が A 説と B

[13] 年令について，以下も史料を尊重するため，全部数え年で記す．
[14] 鷲尾順敬編，1903 年初版，1973 年増訂版，東京：光融館
[15] 結城 [1937] [1941] [1964]，小島 [1990] 参照．

説との間に逡巡するごときである[16]．いずれにしても，現在のところ生年については不明としておく．

出身地についてもまた三説がある．

A. 摂津国難波村（大阪）
B. 摂津国豊島（てしま）郡池田村（大阪）
C. 越中国西礪波郡埴生村（富山）

A 説は「華厳春秋」と『浪速人傑談』の二家の言である．

B と C 説を両方挙げたのは，河野法雲「華厳の鳳潭」[1912],『華厳発達史』[1913]，湯次了栄『華厳大系』[1915]，高峰了州『華厳思想史　改訂版』[1963]，日本仏教人名辞典 [1992]（京都：法蔵館），国書人名辞典第三巻 [1996]（東京：岩波書店），『望月』である．

C 説，西礪波郡埴生村出身（現在富山県小矢部市）説は，富田景周の『燕台風雅』，鷲尾の『仏家』が支持した．又『富山県史』[1983] も近世編に，鳳潭は越中の学僧として最初に挙げられた[17]．

では以上の生没年と出身地二点について，これらの資料をまとめて検討しよう．最も古い五点の史伝資料の中，四点が鳳潭と大阪との関係が深いことを示している．

まず，雨森芳洲は「潭新タニ華厳宗ヲ立ツ，寺有リ松尾南ニ在リ．潭同胞三人，或イハ伝奇ヲ以テ，或イハ諧詞ヲ以テ，倶ニ世ニ于イテ名有リ」[18]と述べ，鳳潭と浄瑠璃の貞峩（紀海音），狂歌の貞柳三人は親戚であるということを示した．貞峩と貞柳は実の兄弟で大阪出身で，鳳潭は享保二十（1735）年十二月，貞峩のため「海音貞峨居士伝」を書いた．この伝記は紀海音没年に出版された追善狂歌集『狂歌時雨の橋』（寛保二 (1742) 年跋）に収載された．伝記の後に「此手記の一篇は千年都より画工を得て師の像を描写せし時乞請し也．もとより潭和尚は法橋（注：紀海音）と遠き縁家にして」云云と灯市が書いた[19]．つまりこれら二名が親戚関係であることをここに裏付けている．

もう一つの紀海音伝記「貞峨菴契因法橋傳」[20]には，「貞峨庵主もとの姓は藤原氏は榎並（えなみ）にして幼より学ひの道にかしこく」と「御家に宿昔の因縁ありけるにや」と記載され，「華厳春秋」の中には鳳潭の父の姓は「名ハ宗伯姓ハ藤氏」と記し[21]，恐らく紀海音と鳳潭の父側は同じ姓を持つために「同胞」「遠き縁家」と言っているのであろうか．また，名和久仁子は鳳潭と紀海音が従兄弟であることに言及している[22]．

---

[16] 神田喜一郎は『墨林閑話』[1977] では B 説を主張したが，『藝林談叢』[1981] では A 説に変わった．

[17] 「越中出身の学僧で先ずあげねばならぬとは，華厳宗を再興した鳳潭（1650–1738）であろう．鳳潭は，京都の松尾にあって鈴虫寺の異名をもつ華厳寺の祖として知られており，砺波郡埴生村の貧しい農家に生まれた．好学の志やみがたく，一二歳の時，発心して比叡山に登り，仏門に入った」（富山県 [1983] p. 797）

[18] 前注 7 参照．

[19] 前注 6 参照．

[20] 寛保三 (1743) 年に出版された追善俳諧集『仙家之杖』の乾巻の序に所収．阪口弘之個人所蔵．

[21] 結城 [1964] は，鳳潭の父は「藤原氏の末流」と判断した．

[22] 「御家に宿昔の因縁ありけるにや」とは従兄弟とも伝えられる華厳宗の僧鳳潭が経典の出版整備に熱意を傾けたこととも関係がありそうである」，名和 [2005] p. 194.

なお，政田義彦の『浪速人傑談』の鳳潭の伝記では，出身地について「摂州西成郡難波村の産」と明白に記している．

最後に，もっとも重要な傍証は鳳潭自身が多くの著述に「扶桑攝津浪華　濬鳳潭」，「浪華後學」，「浪華鳳潭」[23]と署名しており，たとえ京都に住んでいる時でも「扶桑浪華　僧濬鳳潭」[24]，「攝津浪華　僧濬鳳潭」[25]と署名していたことである．「浪華」という署名は現存する当時の出版物，狂歌集，俳諧集，及び散文集などをみると，同時代の文人らがよく使う名詞だとわかる．又，宝永七（1710）年彼が描いた『南贍部洲萬國掌菓図』[26]の署名は，「僧濬鳳潭」という真名も挙げず，「大日本京兆頭陀浪華子」と名乗っている[27]．京都に住んでいたことは全ての伝記資料が明らかにするところであるので，「京兆」と名乗ったとしてもおかしくはない．しかし，その後に「浪華子」と書いてあるのは，出身地を示している仮の名前ではないか．つまり，大日本の京兆にいる「浪華子」が書いたものだという意味である．伝記や著作による鳳潭の率直な性格から判断してみれば，鳳潭がわざわざ出身を隠すことはあり得ないことである．

一方，富田景周はC説の越中出身を支持したが，出典や傍証は特にない．また鳳潭の同時代資料や自身の著作の中でも，「西礪波」・「埴生」などを言及した箇所は，筆者の所見の限り，見当たらない．更に上記した鳳潭自署の「攝津浪華」などから見ると，その信憑性は低いであろう．

以上，大阪出身の四点の史料のほうが，説得力があると言えそうである．では，A説とB説について，鳳潭自署の「摂津浪華」とは，同じく摂津国における西成郡の難波村を指すのか，あるいは豊島郡の池田村を指すのか，少し明らかにしよう．『古代地名大辞典・本編』の「難波」・「難波小郡」・「難波荘」・「西成郡」の項目[28]，『日本歴史地名大系第二八巻・大阪府の地名』の「池田市」・「難波」の項目[29]および特別附録の「大阪市街図」，そして『角川日本地名大辞典』の「いけだ池田」・「難波小郡」の項目および「中世荘園分布図」[30]などを参考すればわかるように，近世に出た「浪華」という表記は，「難波」・「浪速」・「浪花」のことである．四つの表記は同じ発音で同じ場所を指す．つまり，上町台地を中心とする地域といい，おおむね東成郡と西成郡の地が「難波」の範囲である．「難波荘」は平安期からすでに西成郡のうちに存在し，「遺称地名としては近世の難波村がある」[31]．一方，豊島郡は，西成郡の北にあり，「池田」は「猪名川中流左岸，五月山丘陵南

---

[23] それぞれ『因明入正理論疏瑞源記』（宝永元（1704）年，東大所蔵），『法華經義記』の「法華經義疏序」(T33.572a)，「扶桑蔵外現存目録」(『昭和法宝総目録』巻二 pp. 561–570) の署名である．

[24] 京都に住む時著した『起信論義記幻虎録』（元禄十四（1701）年京都刊行）の署名である．

[25] 原文「予乃寓洛之日…元祿歳次己卯仲秋摶桑攝津浪華僧濬鳳潭謹敘」(「新刊賢首國師碑傳敘」T50.280a)

[26] 『南贍部洲萬國掌菓図』（宝永七（1710）年，東大所蔵）

[27] 新修大阪市史編纂委員会 [1989] p. 894 も言及する．

[28] [1999] 角川文化振興財団編，東京：角川書店，pp. 1085–1087，pp. 1120–1121.

[29] [1986] 平凡社地方資料センター編，東京：平凡社，p. 306，p. 359.

[30] [1983]「角川日本地名大辞典」編纂委員会編，東京：角川書店，pp. 114–116，pp. 888–889，p. 891，p. 1776.

[31] 前注 28 を参照．

西の平地一帯に位置」[32]しており，「難波」の範囲に入った記述は見当たらない．

このように，鳳潭自署の「浪華」というのは，豊島郡の池田村より，西成郡の難波村のほうが可能性は高い．しかももっとも正式な伝記である二点がA説–摂津国難波村で一致している．

要するに，『浪速人傑談』と「華厳春秋」がより正確な情報を提供しているのではないかと思われる．

生没年については，現存する鳳潭の著作を見ても自身の年齢には触れていない．しかし，二十年以上の侍者である覚洲には鳳潭の身分資料との接触機会は高そうであり，もし「華厳春秋」の鳳潭伝の信頼性を証明できるならば，万治二年の説は捨てがたい．鳳潭四十才以降の伝記について「華厳春秋」では，主に鳳潭の著作経歴を述べ，近代の辞書編集者や華厳研究者が述べた内容は大同小異である．最も問題点になるのは，四十歳以前の鳳潭像である．同書は若年の鳳潭の難波村における家族状況，出家原因，黄檗僧である鉄眼道光や慧極道明との関係などを具さに叙述し，当時盛んであった黄檗宗との深い関係を明確にしており，すべての伝記資料の中で最も詳細である．其の内，鳳潭と鉄眼の関係の記述はもっとも注目される点であるので，以下，この点に焦点を合わせ，黄檗宗宝蔵院住職であった赤松晋明と源了円などの鉄眼研究の成果と照らし合わせ，「華厳春秋」の鳳潭伝の真実性を確かめていきたい．

3　「華厳春秋」と鉄眼研究成果の照らし合わせ

具体的には，以下「華厳春秋」に挙げられた三つのトピック，①鳳潭僧濬に「菊潭」という別名があること，②鳳潭の兄弟に関すること，③鉄眼遺言の嗣法のこと[33]について，赤松と源了円の鉄眼研究などを参照することによって，その真実性を解明したい．

その前に，まず鳳潭研究と鉄眼研究との関連性について述べたい．以下に，新資料である『浪速人傑談』の「釈鳳潭」伝を全文引用する．

> 釈鳳潭，名潛[34]，鳳潭は字なり，摂州西成郡難波村の産にして，耒耜[35]の子なりしが，幼年より穎語敏捷にして，仏乗に志ふかく，始瑞龍寺にちかき故，鉄眼禅師に随従して禅学を修行せられしが，中年の後一夕華厳経を見て，一切蔵経の中，此経最第一たりとして，是より華厳宗を吾朝に興起せん事を謀り，洛西に華厳寺を建立せられしが，猶此宗風を在俗に弘めん事をはかり，大に心力を尽されしが，当時の習俗を教化するにかなわざりしにや，其宗風行われざりしは残念の至と云べし，此師元より博学にして，内外の典は勿論，国学にも甚委しく，生涯の著述五十余部に及びしが，猶又諸書を編述するに，一日に紙員廿枚と日課を立てられしは，其困苦実に賞すべき事となり，因に記す，京師の人秋里先生の書に，鳳潭が華厳を興起せんとせられし才は逞しけれど，時代の人情を察せざるに於ては，法然親鸞日蓮の三僧に及がたしと書れたり，此詞さる事なれど，先は近代苾蒭中の傑出と云べし[36]

---

[32] 前注 30 を参照

[33] 原文は漢文「告徒曰，道光陪木師席，道光無嗣法，汝等莫要秉於払子」（鎌田 [1981] p. 185）

[34] 潛は，濬の誤りと考えられる．恐らく活字化か転写する際の誤りであろう．

[35] 「耒耜」の原義は農具の名称．ここでは，農家を指す．

[36] 市島 [1908] pp. 405–406

つまり，『浪速人傑談』の鳳潭伝には，「始め瑞龍寺にちかき故，鉄眼禅師に随従して禪学を修行せられし…」といい，「難波村」の出身および鉄眼・鳳潭の師弟関係をここで初めて結びつけている．鳳潭が鉄眼の弟子であることは他の資料にも散見される．

だか，鉄眼がなくなった後から壮年，華厳寺を建立するまでの鳳潭像は『浪速人傑談』では不詳である．後述のように，赤松晋明と源了円の鉄眼研究によって明らかにされたように，鉄眼が亡くなった後，鉄眼教団が分裂し，鳳潭の師兄である宝洲一派は，黄檗宗の教団勢力をたもつために，鉄眼の「嗣法なし」という遺嘱を無視し，直接木菴性瑫の法を継承することになった．一方，鉄眼の遺嘱に忠実に従う弟子たちは解散した．この鳳潭も後者の一員である．彼は鉄眼の死後，遊学の後に華厳寺を建立し，華厳学を顕揚していた．

では，上記の三つのトピックについて，まず，鳳潭の別名「菊潭」について述べたい．赤松晋明 [1943] の研究は，鉄眼没後の弟子たちの状況に触れている．鉄眼が亡くなったとき，百余名の弟子たちの主なものは「如空，悦堂，慈海，**菊潭**，檀渓，宝洲，端愿，宝山，**雲宗**，文暁，洪音，聾石，暁宗，本瑞，至堂，恭堂，大信，勝算，満海，聖諦，**学海**，覚林，得全，大翅，語雲，雪巣等」[37]である．その中に，菊潭，雲宗，学海という名前が現れていることに注意したい．

また鉄眼の弟子であり，宝洲と同年輩の端愿（また道亮という）が書いた『善悪邪命論』[38]には，三月七日の鉄眼の「遺嘱を聞くもの，五侍者中，慈海，**雲宗**，暁宗は其後早逝，宝洲，**菊潭** 二人以外，宝山，本瑞，悦堂なり」[39]とある．

すなわち宝洲，雲宗，慈海，菊潭，暁宗は鉄眼の五侍者であり，中でも菊潭は普通の弟子ではなく，百名余の弟子の中に遺嘱を聞いた僅か八人のひとりであるということがここで確認される．

「菊潭」を始め，雲宗，学海という名前が鳳潭の史伝資料の中に唯一現れた箇所は「華厳春秋」にある．「華厳春秋」には，鳳潭の家族における兄弟四人，兄雲州[40]，姉珠連，菊潭本人，弟学海が皆鉄眼の弟子となり，「菊潭」という法字と「僧濬」という道号は鉄眼から得たとある．鉄眼がなくなる二年前の 1680 年，江戸に行く時二十二歳の菊潭は鉄眼に侍したこと，また，鳳潭という名はその後自分で変えたという記述がある．

では，鳳潭は「菊潭」であろうか．覚洲は当時鉄眼とその弟子たちの話を調べ，故意に菊潭と鳳潭の名を繋げ，菊潭の家族が傑僧である鉄眼と密接な関係であることを示し，鳳潭の出身地もこれと合わせて変更し，それによって鳳潭は鉄眼の弟子だと世間に信じさせ，亡くなった本師の地位を高く位置づけしようとしたのだろうか．

村松法文の「鳳潭肉筆雲華院蔵倶舎論光法二記」[41]の調査によれば，「この度見出された

---

37 赤松 [1943] p. 342

38 『善悪邪命論』に関する紹介は，赤松晋明 [1943] pp. 346–353 を参照．今回筆者も入手できず，赤松 [1942] [1943]，源 [1979] に収録されているものによった．

39 赤松 [1943] p. 340

40 「華厳春秋」により，鳳潭の兄は雲州というが，赤松 [1941] [1942] [1943] および源 [1979] により，全て雲宗と書いてある．おそらく覚洲は書面材料を見ることではなく，口伝で知ったのであろう．「州」と「宗」は発音が同じである．

41 村松 [1970] pp. 84–94．光記とは「倶舎論記」（唐・普光述），宝記とは「倶舎論記」（唐・法宝述）を指す．

二本はいずれも写本であるが，各々奥書があり，筆写の年時・場所及びその時の感想を披歴した詩などが記されている」，「各巻の奥書には『僧濬菊潭』の名が見出される」，「皆『僧濬菊潭敬写』と記されている」とある．

以上，鳳潭僧濬と菊潭が同一人物であることは，赤松の資料と村松の調査を照らし合わせてみると明らかである．僧濬は菊潭のことであり，菊潭は鉄眼の侍者であり，別名は鳳潭であるということである．つまり，鳳潭は鉄眼の侍者であり，且つ遺言を聞いた八人の一人であることは，「華厳春秋」以外の資料からも証明された．なお，「華厳春秋」によると，寺号「華厳寺」の額は隠元禅師の筆跡だという点も現存の額の筆跡で確認できる[42]．鳳潭が隠元禅師の筆跡を掲げることからみても，黄檗宗との関係を伺わせる．

次に，鳳潭の兄弟の問題について述べたい．雲宗の状況はどうであろうか．先述したように，『善悪邪命論』に，「五侍者中，慈海，**雲宗**，暁宗は其後早逝」といい，「華厳春秋」では元禄九（1696）年の条に「十月和尚肉兄雲州卒」と記されており，四十六歳の若さでなくなった．また，「華厳春秋」に言及された鳳潭の姉珠連は鉄眼の弟子であることについて，鉄眼の女性観について付言すれば，赤松は「将来，鉄眼の大事業の陰には，女性の大きな力が働き支援を受けたことも多い，加之鉄眼の教へを受けて，尼僧になった者も多数あり，且つ女子説法とも云ふべき『鉄眼禅師仮字法語』の上梓などは，鉄眼の女性観としての，一つの現われでもあらう」[43]と述べている．珠連が鉄眼の門下になった旨の「華厳春秋」における記述の一つの裏づけとも言えよう．

最後に，鉄眼示寂後の法嗣の問題について述べたい．「華厳春秋」では，鉄眼が寂する前に弟子に語った言葉として，「徒に告げて曰く，道光は木師の席を陪（そ）う，道光嗣法無きなり．汝らよ！ 払子を秉（と）ること莫れ」[44]と記す．権威的鉄眼伝記である『瑞龍開山鉄眼和尚行実』にはこの事は触れられていない．結局は本師の意に違背し，瑞龍寺住職となった宝洲にとってこの事実の記載は都合が悪かったのであろう．しかしながらこの事は，木菴語録の延宝四年の項目にも述べられている[45]．「鉄眼知藏，肥後より本山に回る．礼拝して自ら謂へらく，法華を講じて以て先厳に報ぜんと欲す．師，払子を竪てて云ふ，上座法華を講ぜんと欲す．経に四安樂行有り．這個を離れず，上座還って這個を識るかと．眼云ふ，識ると．師云ふ，作麼生識るやと．眼云ふ，行住坐臥這個を離れずと．師云ふ，向上に再び一句を道ひ看よと．眼便ち喝す．師云ふ，向後講経の僧と称すべしと．師遂に払子を以て付して云ふ，這枝の払を上座に与へて信を表はさん．眼便ち礼拝す」．

端愿の『善悪邪命論』には，鉄眼の死に当って三人の弟子たちが「御自身ノ身嗣法ヲ後悔被遊今時ノ途轍ニ落テ嗣法御残シ候事御道徳軽ク罷成ルト辞退仕ル」と口を揃えて言ったこと[46]，また，「宝洲，慈海，雲宗の三人に嗣法可致と被申たが，先師の道徳を損するを

---

[42] 京都市の地名　華厳寺の条（『日本歴史地名大系』27 巻，西京区 p. 1112，平凡社 1979）

[43] 赤松 [1942] p. 37

[44] 前注 33 を参照．

[45] 原文は漢文「鉄眼知藏，肥後回本山，礼拝自謂，欲講法華以報先厳．師竪払子云，上座欲講法華，経有四安樂行，不離這個，上座還識這個麼．眼云識．師云作麼生識．眼云行住坐臥不離這個．師云向上再道一句看．眼便喝．師云向後可称講経僧．師遂以払子付，云這枝払与上座表信．眼便礼拝．」（源 [1995] p. 36）

[46] 源 [1979] p. 162

惶れて，その嗣法を辞退せり」という記述もある[47]．侍者である三人は恐らく鉄眼の最も優れた弟子で，教団に尊敬されたと見られる[48]．

「華厳春秋」では，鉄眼の弟子について「雲州，宝洲以って上足（高弟という意）と為す」といい，嗣法については「瑞龍の徒衆は師の席を雲州に推し，雲州は受せず」と記した．

4　結論

このように，「華厳春秋」中の三つのトピックに関して，その真実性を他の研究によって立証することができる．他にも，種々の鉄眼研究と互いに呼応するところ，あるいは補い合うところも多いが，ここでは一々羅列することを省略する．

以上「華厳春秋」の鳳潭の生没年・出身地に関する記載内容については，正確であると考えられる．つまり，鳳潭は大阪の摂津国難波村出身で，万治二 (1659) 年生まれ，元文三年（1738）79 才で没すると考えられた．

しかし「華厳春秋」の鳳潭年譜は鳳潭の没した十七年後，覚洲の記憶と知りうる限りの資料によって成されたものであり，事項は他の資料より確実ではあるが，事項の年代や，鳳潭の著作の出版年と現存する刊本の出版年とが一致しない場合もあることも考慮すべきである．鳳潭の 63 部 233 巻の膨大な著作の内の，三，四冊の著作の出版年について実際より遅く記したものもある[49]．勿論，一度出版しながらも後に修正し改めて出版された可能性もある．現在残された刊本の中には弟子等により既に「再治」されたものもある．そのような場合，鳳潭の同じ著作の全ての刊本を集め，照らし合わせる作業が必要であろう．なお，黄檗宗の宝洲道聡が書いた鉄眼の年譜行実と「華厳春秋」を照合する必要もあろう．上記の二つの問題については今後の課題としたい．

---

[47] 赤松 [1942] p. 105.「嗣法可致」について，宝洲が瑞龍寺の住職になった結果から推測すると，恐らく鉄眼弟子の一部か黄檗宗本山からの願いであろう．

[48] 源 [1979] p. 160

[49] 刊行年について，『金剛槌論』は刊本では 1734 年であるが，覚洲は 1736 年とした．『円宗鳳髓』は刊本では 1713 年であるが，覚洲は 1714 年とした．『冠註講苑倶舎論頌釈疏』は刊本では 1707 年であるが，覚洲は 1710 年とした．

（参考文献）

赤松晋明校訂
［1941］『鉄眼禅師仮字法語』, 岩波書店（岩波文庫 33-333-1）, 東京.
赤松晋明　［1942］『鉄眼禅師』, 弘文堂書房, 京都.
［1943］『鉄眼』, 雄山閣, 東京.
市島謙吉　［1908］『続燕石十種』第一, 国書刊行會, 東京.
鏡島元隆　［1951］「華厳鳳潭と禅」, 『日本仏教学会年報』16 号, pp. 28–42.
鎌田茂雄　［1981］「覚洲鳩の華厳宗史観」と附録「大日本華厳春秋」, 『東京大学東洋文化研究所紀要』86 号, pp. 153–190.
亀谷聖馨 河野法雲
［1913］『華厳発達史』, 名教学会, 東京.
神田喜一郎［1977］「鳳潭・闇斎・徂徠」「鳳潭余話」, 『墨林閒話』, 岩波書店, 東京.
［1981］「江戸時代の学僧たち」, 『藝林談叢』, 法蔵館, 東京.
※上記神田喜一郎氏二本は後に『神田喜一郎全集』（[1987] 京都・東京：同朋舎）に転載.
小島岱山　［1990］「大乗起信論と鳳潭」, 『如来蔵と大乗起信論』平川彰編, 春秋社, pp. 639–661.
塩崎幸雄　［1994］「富永仲基と黄檗宗」, 『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』27 号, pp. 79–90.
新修大阪市史編纂委員会
［1989］『新修大阪市史』第三巻, 新修大阪市史編纂委員会, 大阪.
全日本仏教会寺院名鑑刊行会編
［1969］『全国寺院名鑑・近畿篇』, 全日本仏教会寺院名鑑刊行会, 東京.
高峰了州　［1963］『華厳思想史　改訂版』, 百華苑, 京都.
富田景周　［1915］『燕台風雅』, 観文堂（東大所蔵）, 金沢.
富山県編　［1983］『富山県史・通史編 4・近世下』, 富山市, 富山県.
名和久仁子［2005］「紀海音考—近世上方の文人の素顔—」, 『都市のフィクションと現実』, 大阪市立大学大学院文学研究科『COE 国際シンポジウム報告書』第四部, pp. 191–200.
日本随筆大成編集部編
［1974］『日本随筆大成』第二期の 7 , 吉川弘文館, 東京.
原念斎著, 源了円・前田勉訳注
［1994］『先哲叢談』, 平凡社, 東京.
源了円　［1979］『日本の禅の語録　17 鉄眼』, 講談社, 東京.
［1994］『禅入門 10　鉄眼　仮字法語・化縁の疏』, 講談社, 東京.
村松法文　［1970］「大谷大学図書館蔵「鳳潭肉筆雲華院蔵倶舎論光法二記」について」, 『仏教学セミナー』12 号, pp. 84–94.
結城令聞　［1937］「鳳潭の華厳・真言両大乗一致の思想に就いて」, 『仏教研究』一ノ二, pp. 82–107.

［1941］「華厳鳳潭と真言宗宝林学派との論争（一）」,『仏教研究』五ノ三, 四, pp. 41–90.

［1964］「華厳鳳潭の研究—特に起信論幻虎録を中心として」,『干潟博士古稀記念論文集』, pp. 549–560.

※上記結城氏論文 3 本は, 後に『結城令聞著作選集 (第二巻) 華厳思想』（[1999] 東京：春秋社）に転載

横山正 等　［1980］『紀海音全集』第八巻, 海音研究会編, 清文堂, 大阪.

鷲尾順敬編［1966］『日本仏家人名辞典』, 東京美術, 東京.

王 芳　［2007］「鳳潭の『鉄壁雲片』にみられる禅理解について—曹洞偏正五位と六即を中心に」,『印度学仏教学研究』55-2 号, pp. 245–248.

［2008］「鳳潭と永覚元賢の曹洞偏正五位理解について」,『インド哲学仏教学研究』15 号, pp. 131–143.

2012.1.7 稿

わん　ふぁん　　東京大学大学院博士課程

A Consideration of Sōshun Hōtan's Year of Birth and Birthplace

Fang WANG

The Japanese monk Sōshun Hōtan(僧濬鳳潭) of the Edo Period wrote a large number of Buddhist works covering Kegon, Tendai, Shingon, Zen etc. He was renowned at the time. However, regarding his year of birth and birthplace there are three kinds of records respectively.

The paper attempts to clarify Hōtan's year of birth and the birthplace through analyzing the five oldest historical records concerning his biography, of which the three are newly found by the author. It is revealed that the records of Hōtan's year of birth and the birthplace in Dai Nihon Kegon Shunjyū 大日本華厳春秋 written by his disciple Kakushū(覚洲), is one of the most trustworthy sources after a reliability consideration on it. That is to say, Hōtan was born in 1659 at a village named Naniwa(難波).